

転生したら自己中キャ
ベツ刑事の親族だっ
た！

レタス野郎

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

自己中キャベツ刑事の親族として転生し、自分なりに足掻くも挫折した転生者が、ガムシヤラに仲間たちと共にペルソナの世界で、自分が目指すハッピーエンドの為に足掻きまくる話。

※時間系列はペルソナ5です。

※本作のペルソナ5はペルソナ4から5年後に設定した二次創作です。

目次

転生してもダメダメすぎる	1
継承された虚無	11
未確認化け猫出現注意!	32

転生してもダメダメすぎる

おそらく、俺は転生という物をしたらしい。

おそらくというのは、自分の死因や死ぬ前の出来事を思い出すことができないからだ。思い出そうとすると、まるで脳内をナニカに塗り潰されていくような未知の感覚を持つてしまうので、無理だ。思い出せることと言えば、一人っ子で趣味はアニメとゲーム、学生時代は友達と家に集まりゲームをして遊び、社会人になってからも月に溜まった給料で1本のゲームを買い、家に帰ってからゆっくり遊んでいた。というなんとも普通過ぎる記憶であった。しかし、その程度の記憶は残っているものの、家族や自分の名前、友達は何人いたのか、恋人はいたのか。そんな事が思い出せない。全く、クソみたいな記憶力だよって呆れもした。転生したという自覚を持ったのが、10歳の頃に肉体に精神を引つ張られていたのか、何とか思い出そうと毎日のように悩んでいたが、時が経つにつれその執念も冷めていき、今ではあまり気にしないことにしている。

そして、俺が転生したのは前世でよく遊んだゲームである『ペルソナ』の世界であった。加えて、如何いう訳かは分からないが俺のはとこは、『世の中クソだな！』で、お馴染みの自己中キャベツ刑事デカの足立透であった。

一言だけ叫びたい……転生したのにクソだな!!

まあ親族としての透さんは正直に言えば、割といい人だった。

ペルソナの記憶がなければ、本当に殺人犯になるなんて思いもしなかっただろう。そんな風を感じるほどに俺にとつては、透さんはいい兄貴でもあった。

転生してからもペルソナ4での事件の詳細を臚氣に憶えていた俺は、何かにつけて透さんの犯行を辞めさせたいと勝手な正義感で、小学生ながらあの手この手で頑張ってみたが、結果は散々だった。その結果、透さんは原作通り、シスコン番長に敗れ、殺人事件の真犯人として逮捕された。親族から犯罪者が出てしまったことで、ウチの家庭も周りから色々言われる羽目になってしまった。

父は何処で嗅ぎつけられたのか、バレたのか、透さんの事件のことが広まり会社を辞めざる終えなくなった。また、学校で俺も色々言われたり、サレたりもしたが、所詮はクソガキどものチープな嫌がらせとして鼻で嗤ってやった。こんなものよりも父や母の方がもつと苦しい思いをしていると思えば、余計に耐えることができた。

そして、両親の人柄の良さが功を記す形で心のある色々な人の助けを少し借りて、引越先で父と母は再就職先を見つけることができた。これはマジでよかったと思う。後、透さんは透さんの両親から勘当されているが、俺はコッソリ偽名で透さんに手紙を出したりしている。普通に透さんには、気づかれているので返信の文章にはもう少

しマシな感じて書いてみる下手くそって言う感じで書かれていた。相変わらずで何よりであった。俺自身が堂島さんほどではないがあの人は、割と仲が良かったと勝手に思っている。夏休みを利用して、遊びに行き、メンドクサイと言いなながらも泊めてくれたし、酒が回っている所為なのか割と色々な愚痴を俺の前で吐き出してくれたりもした。まあ、酔っ払いの世話をするのは結構疲れるが、今でも俺はあの人のことを大っ嫌いにはなれなかった。

色々あったが、そんなこんなで今は16歳というピチピチの高校生となった。

先程言った通りあまり記憶も蘇っておらず、学力や運動能力で周りとは、ほんの少し差がつくが、わりと平凡に高校生活を送っている。

だが、ここで新たな大きな問題を抱えることになった。

この世界が恐らく「ペルソナ4とペルソナ5が連結している」という事だ。

ペルソナ4は、分かりやすく言えば1人の愉快犯から始まった殺人事件を高校生達がテレビの中へ入り、ペルソナという己の醜い部分を曝け出した自分を受け入れる形ですつ不思議な力で、事件を解決していくというもの。

対するペルソナ5とは、世の中の理不尽に悩まされる高校生の主人公とその仲間が、ペルソナという理不尽な現実に叛逆する意志の力に目覚め、「怪盗団」として心の世界に入り込み、悪い大人達を改心させて行く。

ざっくり言えばそんなゲームである。

ペルソナ4とペルソナ5が連結しているということに気づいたのは、中学時代に親と担任教師から勧められた高校が「秀尽学園高校」だった時だ。

高校の名前にしては、あまりにもインパクトのある名前だったためなのか、今の自分の記憶にも残っていた。また、この秀尽学園高校通称「秀尽」とは主人公達が通う学校であり、ペルソナ5においても様々な事件に関わる場所である。そんな場所に通うことに対して、事件に巻き込まれたくないという思いが強く、最初は別の高校にしたい、と希望した。

当然だ。自分は何もできないということを嫌というほど味わったのだから。しかし、家から近いことや、親と学校の勧めを断れるほどの理由が全く思いつかず、結局秀尽に通うことになってしまった。

とはいえ、大人しくしていれば主人公達と関わることもなく、別に問題ないと、割と楽観的に考えてもいた。だが、同時にこの学園で犠牲になる者達のことを分かっていたものの、何もできないことを言い訳に逃げている俺は、クソだなと思ってしまった。

そして、そのまま入学し入学式を終え、クラス内での簡単な自己紹介も終わり、今日は簡単な説明を受けて帰ろうとした時に、ある人物に声をかけられた。

そうそれは坂本竜司だった。

如何やら、竜司は先生の話を俺の後ろの席で寝ていたため消えておらず、教えてほしいとのことだった。メンドクサイと思ったが、それくらいならいいかと思ひ、メモしていたことを教えて終わりだと思つた。

しかし、その考えは甘かつた。

まるで誰かさんが羨望と嫉妬を抱かれていた番長さんのように、竜司は俺に関わり続けてきた。訳を聞いても、『友達になるのに理由はいらねえ』とのことだった。それを聞いた時、思わず腹を抱えて笑つてしまった。そうだ、そうだった彼はそう人物だったのだ。損や得、理屈など関係なく、彼はそうやって動く人なんだ。だからこそ、俺はこいつといへも全く悪い気もせず、楽しいんだと改めて気付かされた。透さんの件から色々と拗らせてもいた俺からすれば、ソレは本当に眩しいものだった。それでも俺は、彼の友達になつてしまつたんだと分からされてしまった。つたく、この頃から怪盗の才能を發揮するなよと密かに思つたのは余談だ。

そんなある日。

放課後、今日はバイトも無いし、竜司の様子でも見に行くかと陸上部のグラウンドまで歩いて行つた。すると、グラウンドの方から竜司の怒鳴り声が聞こえてきた。驚いて、急いでグラウンドへ走るとソコには、

「てめえ……もういつペン言つてみる！」

竜司が物凄い形相で、教師鴨志田を睨んでいた。

この鴨志田はペルソナ5における、最初の事件の犯人。バレー部に体罰を行い、女子生徒に手を出し、坂本を陸上部から退部にしたクソ教師。暴力事件として大袈裟に広め、竜司の居場所と足を潰した男でもある。竜司はよく、鴨志田の愚痴をこぼしていたので、よく憶えている。

ーやめておけば？

何故かはわからないがあの人声が聴こえてきた。

おそらく、このままだと竜司は鴨志田を殴るだろう。そうならば彼は退部になり、足を潰され、学校からの居場所も失う。だが、それで終わるわけではない。竜司は、2年生のある日に主人公と出会い、結果的に鴨志田の事件を解決して、怪盗団として新しい仲間と人生を歩み、もう一度陸上をやる為に歩き出す。

ーここでキミが行ってもボクの時と同じで無駄だよ？

ーそれにキミが行ったらキミの居場所もまた無くなる

そうだ。止めれば俺の居場所が無くなる上に、また両親に迷惑をかけてしまう。鴨志田はゲーム内でも、前科持ちとして主人公の悪い噂を転校そうそう広めた。奴は自分に歯向かう可能性があるやつを、徹底的に潰すのだろう。歯向かえば、俺も潰される。

ーだから、今動かないのはしょうがない事だよ？

……確かにそう……だが……。

——黙って見ないフリをする簡単なことだろ？

……友達を見捨ててもいいのか？

——実際にキミは見捨てられただろ……周りの誰もがやっていることだ

……それでも……俺は……ッ！

頭の中で思考がぐるぐると回る。考えている間にも聴こえてくる内容からして、鴨志田は竜司の母親のことを罵り、さらに竜司の怒りを強くしていく。

止めるな！見捨てろ！巻き込まれるな！！

色々な考えが頭に渦巻いていく。ここで竜司を見捨てれば、友達としての関係も終わる。

「てめえ！！」

坂本が鴨志田に向けて走り出し、ニヤけた顔の鴨志田に向けて拳を振り抜こうとしている。

だが、竜司の拳が振り抜かれる前に、俺が鴨志田の頬を殴った。

「はあ？」

呆気にとられたように鴨志田が口を開く。

「お前…なんでなんだよ、英治!」

絞り出すように、我に返った竜司が声を出した。当然だろうな。突然、友達が割り込んでムカつく相手を殴ったんだからな。それも横取りする形で。

あゝあ、やっちまったな。

つたく、ホント俺にこんな選択をさせるとか、この世界もクソだな!

これで、俺の学校生活は終わるかもしれないな。

マジでヤベエーわ。

でも、それほど後悔はしていない。

やりきった顔でワザとらしいニヤつき顔で鴨志田に笑ってやると、顔がみるみるうちに赤くなり、こちらを睨みつける。

ーまったく、キミも気持ち悪いくらい馬鹿だね

「貴様ア!!!」

「うるせえ、バーカ」

あの人に向けて言ったのだが、どうやらこのアゴ教師は、自分が言われたと思ったのか、怒鳴り声を上げ、俺のみぞおちを殴ってきた。

ハハ、お前になんて言う価値もねえよ、クソめ。

でも、咄嗟に防御を試みたけどキツイなコレは。なんとか、踏ん張ることが出来たが、その後から何発も殴られた所為で、とうとう耐えきれず、ぐえつ、と潰れた声を上げながら、その場に倒れてしまった。情けねえ。

「あと少しという所で！このクソガキが!!」

「ぐつ…へ、よく言うぜ…え…クソエロゴリラが」

「貴様あ!!!」

更に怒りを爆発させたことで、さらに鴨志田は声を荒らげ、俺を強く踏みつけ続ける。つたく、流石運動部顧問というべきか、蹴りがいちいち重いんだよ。エロゴリラが。踏まれた所が青くなつていくじゃねえーか。

殺す気マンマンと言わんばかりのあまりの迫力に、近くにいた陸上部員達の顔は真っ青になつている。そーそー、お前らはそのまま何もすんなよ。

あ、ああマジで痛いわ、コレは。今の人生の中で味わったことの無い苦痛だわ。つて、1度目の人生では死んだわけだから、これ以上の苦痛を味わっているのだから自分で覚ねえーから、ノーカンだな。朦朧とする意識と鋭い痛みの中、現実逃避による訳の分からない思考を続けていると、

「やめろお!!」

竜司の叫び声の中、俺こと近藤

英治は意識を遠のいて行く。

ーやれやれ、損得の選択もできないなんて、キミもまだまだクソガキだね。
ふっ、あんなクソゴリラよりはマシだろうが。

ーさて、どうかな。キミが思っているよりも世の中クソだから精々足掻いたら、ボクの時みたいに。

うるせえ、バーカ。

はあ、ホント世の中ってクソだなあ、オイ！

この最後の幻聴のやり取りを終えた後、俺は意識を完全に手放してしまった。

継承された虚無

鴨志田のクソ野郎にボコられた俺は、半日もかけて目を覚ました。様子を見に来ていた看護婦さんに何時なのかを聴くと、ちょうど昼の12時くらいであった。その後、私服の竜司が来たので、鴨志田にボコられた後のことを聞くと、申し訳なそうに話してくれた。

簡潔に言えば、あの後俺を蹴り続ける鴨志田を止めるため、竜司は殴りかかったらしい。何やってんだよ。って俺が言えた義理ではないけど。そして、それを待っていたと言わんばかりに鴨志田が騒ぎ立て、周りの教師を呼び、竜司と俺が暴力を振るった。そう言つて、暴力事件を起こした生徒として、親と学校に広められた所為で、陸上部は廃部となった。早くね？殴ったの昨日なのに。

ついでに、俺の怪我は全治2週間だそうだ。身体のアちこちが青く腫れてもいるとは言え、後もつかず、それほど時間がかからないみたいで良かった、と思うべきだろう。

「本当にすまねえ！俺の代わりに英治が鴨志田をぶん殴つてまで、俺を止めてくれたのに……」

「気にするな」

「ダチが殴られてるのを俺はやっぱ黙って見てるなんて出来ねえ。どうしても、止められなかった」

「お前はそう言う奴だもんな。損得なしに行動する良いやつだよ」

俺が勝手に馬鹿やって、勝手に殴られただけなのに。

なのにコイツは、そんな馬鹿な俺を見捨てないで、手を出す程に怒ってくれたことに、嬉しい気持ちさえあった。はあーあドンドン毒されていくなあー俺も。

「俺の為に怒ってくれてありがとな、竜司」

「おうよ！いいってことだぜ！こつちも本当にありがとな、英治」

俺からの礼に対して、一瞬ポカンとしていたがやがていつものようにニカツと眩しいくらいの笑みを浮かべる竜司を見て、やっぱコイツはこういうバカみたいに笑っている顔がよく似合うと俺は密かに思うのであった。

「多分、鴨志田はこの事を学校中に広めるぜ。暴力事件を起こした2人、ってな」

「だろうな、あのクソアゴエロゴリラならやりかねるな」

「あー俺らは明日から不良扱い。お前なんて、あんなに殴られたつてのに、ふざけんじゃねえつての！」

「お前の方は何とも無いのか？」

「ああ、俺は別に何ともない。でも、鴨志田は元オリンピック金メダリストで、そんで

もって自分のバレー部を全国にまで行かせてる。教師の連中は、あいつが何言っても首を縦に振るし、お前の怪我のことも、事故だとかなんだとかで丸め込まれちまうのが、関の山だ」

「だろうな、アイツにとつて学校は自分の城みたいなモノに見えているんだろうな」

「くそっ！」

悔しそうに、竜司は拳を強く握りしめて行く。

ある程度覚えてるゲーム記憶の中では、鴨志田も学内で相当な悪事を働いていたが、周りから咎められるようなことは一切無かった。

覚悟してはいたためなのか、これといった悔しさや怒りは無かった。その後、俺と竜司は互いの親に事件のことをキチンと話すことを約束した。当然だ、先に殴った俺はともかく、竜司はこんな俺を助ける為に拳を振るつたんだ。親に何か言われる筋合いはない。

その後、一通り談笑した後、竜司は帰っていった。その後、母親が来たが何故かあまり心配した様子はなかった。訳を聞いても、『アンタが訳もなく人を殴るような馬鹿じゃないことくらい誰より分かってる。どうせ、相手が悪いだろうし』とのことだった。信じてくれるのはありがたいが、もう少し心配ぐらいして欲しいものだ。複雑すぎる。まあ、竜司の脚が潰れなかった上に陸上部の部員達との溝はそこまで深くは無さそうで

安心した。

その後、8日間の入院生活後退院した。後の傷は湿布や傷薬を塗れば治るそうだ。入院生活では、竜司の見舞いが毎日有ったり、母の新作の小説の感想を求められたりも定期的にあつたため退屈もしなかった。そして、学校へ戻るとどうやら鴨志田を殴つたこと以外にも、透さんの事件のこともバツチリ広まっているようだ。このどちらも竜司から聞いていたので別に大した興味もない。まあ、俺が殺人犯の親族であるつてことを知つても竜司の態度が変わらなかつたのは少々驚いたりはした。理由を聞いても、『ソイツはソイツで、お前はお前だ』とのことだった。おかげで、病室にいるにもかかわらず大笑いし、看護婦さんにどやされてしまったのは余談だ。ホント、コイツは俺を笑わせることに関しては天才的だわ。

そんなことを振り返りながら自販機で飲み物を購入していると、

「おやおや誰かと思えば、俺を殴つた殺人犯の親族くんじゃないか」

「おやおや誰かと思えば、鴨志田センセじゃないですか。手は大丈夫ですか、何発もナニカにつぶけたんじゃないですか？」

呆れとあの人譲りの嘲笑を送つてやると、さつきまでのニヤニヤ顔は一変して屈辱感で顔を顰めていく。おうおういいですなあ、その力才。よく似合ってますよ。

「貴様：調子に乗るなよ。俺の気分次第でお前達はいつでも消せるんだからな。それ

に、そんな心配をするよりも自分の心配をしたらどうだ？アイツ以上に、お前の居場所はないんだからな」

実際に今回の事件から察するに、鴨志田にはそれくらいの権力があるのかもしれない。というか、よく透さんのことを調べたな。その手腕に拍手を送りたいくらいだ。しかし、流石に退学は困るので、暫くの間はできるだけ大人しくしておいた方がいいのかもしれない。

そんなことを考えている間に、フン、と臭い鼻息を出した後、気分を悪くした鴨志田が去っていった。マジで臭い。生徒を病室送りにするんじゃないかと、自分が病室に行け。

「おつ、英治メシ食わないか？つて、鴨志田の野郎じゃねえか」

鴨志田を睨みつける竜司と共に屋上で昼食を取りながら、先ほどのことを話すと、

「鴨志田の野郎はプライドを傷つけられるとすぐキレるから、けつ！オツムの小さい野郎だぜ」

「竜司、そういう時はオツムじゃない。それを言うなら、『器の小さい野郎』だ」

色々残念な悪口を呆れ顔でツツコミを入れてしまう。

「こ、こまけえーことはいいだよ。それより、色々とお前は俺以上に目をつけられているから大人しくしておけよ。つて、俺が言えたギリじゃねえーけどな」

そんな竜司と昼食を食べてた後、鴨志田に会うことなく帰宅した。

その後の数ヶ月も特に何事もなく、たぶん普通の高校生活の1年間が終わった。時間が経つ事に噂されることも減ったが、今も普通ひ避けられてはいるが、普通に学校生活を送れている。また、透さんの事件のことで、嫌がらせの五つや六つはされると思っていたが一度もされなかったことには、不気味に感じたりもした。これに関しては、竜司が周りの目など気にせず話しかけてくれたおかげだと思うことにした。

やがて月日は流れ4月になり、学校が始まり、2度目になる入学式を迎えた。

とは言っても、大した変化も無く、2年生の春を迎えるのだろうと、思っていた。

だが、運のクソ悪いことに、2年になってから竜司とは別のクラスになってしまった。確率的には普通のことだが、俺が孤立しやすいように、鴨志田が裏で手を回してもしたのだろう。いや、あのクソ野郎なら絶対そうしただろう。そんな待遇の俺と違い、竜司は元陸上部とは同じクラスであったため、ある程度は孤立せずに済んでいる。本当によかったですと思っている。まあ、陸上部は俺を助ける為に鴨志田へ殴りかかった竜司を見ているので、わだかまりはない。そのため、ちやつかりジムでも一緒にトレーニングをしている。

完全なるボッチである俺を竜司は気を使って、休み時間には出来るだけ俺のクラスに来て話をしている。ありがたいが、申し訳ない。

鴨志田と噂がある高巻杏と同じクラスになってしまったが、厄介者扱いの俺には特に関わって来ることも無く、これといった問題も起きていないが、あいも変わらず運がクソな所為で席は割と近くになってしまった。

そして、このクラスは、主人公のジョーカーとも同じクラスだと言うことにちよつと絶望した。

ホント学校も俺の運がクソだな!!

そんな感じのいつもと変わらない日々を送っていく中で、彼に転機が訪れた。

「おい、あれ高巻じゃねーか！それに車に乗ってるのは……鴨志田ッ！」

「あいも変わらず、煩惱のクソ塊だな」

「んなこと言つてないで行くぞ！高巻なんかされてるかもしんねえ！」

陸上部としてトレーニングを欠かしていない竜司の後をなんとか俺もついて行く。本来なら、元陸上部の竜司にちよつと遅れはしたが、ついて行くのはキツすぎるのだが、あの事件から俺もジムでトレーニングを始めたおかげでかなり筋肉がついた。そのおかげで、息も切らずにすんだ。

「待てー！」

そんな竜司の叫びが聞こえないのか、或いは聞こえないフリをしているのか。そのま
ま鴨志田の車に高巻が乗り込み、車が道路を走っていった。たぶんコレは後者の方だと

思う。ミラー越しに、鴨志田の顔には笑みが浮かんでいたように見えたからだ。

「クソ…あの変態教師が」

諦めた竜司が立ち止まり、呟く。

「変態教師？」

「(とうとう会ってしまったか…なるようになれだ)」

そこでもうやく、近くにいたベルソナ5の主人公であるジョーカーがそれを聞いて思わず呟いた。そんな呟きを聞きながら俺は、無駄に考えるのをやめていく。

「ん？」

その呟きを聞いて、竜司が主人公の方を向く。

「なんだよ。鴨志田にチクる気か？」

「カモシダ？」

少し苛立っている竜司がやや喧嘩腰で主人公に話しかけてしまう。鴨志田のことを知らない主人公は、思わずその名前を聞き返す。とりあえずパレスのことは置いておくとして。話が終わらなそうなので、話に入る。

「竜司、そいつは転校生だ。鴨志田のことも、俺やお前のことも知らないよ。一昨日にホームルームでも言われてたと思う…たぶん」

そういう俺も、主人公と同じクラスになったショックで転校してくる日を聞きそびれ

るといふ失態をしでかし、今の今まで今日が始まりの日だと覚えていかなかった。ぶつちやけ、もうだいたい原作知識が薄れてはいるが、部屋に厳重に保管してしてある『転生ノート』にある程度の今後のことは書いてあるためだいたいわかる。とは言っても、何日にどのような事件があるのかはわからなかった。あくまで、その事件の次の事件のターゲットやその関係者くらいの名前などが書いてあるだけだ。

「多分つてなんだよ。そんなこと言われてたっけ？全然覚えてねーよ。」

俺の言動に呆れている竜司が言う。

まあそんな事だろうとは思ったよ。今でも、課題見せてえー！って言いに来るからな、お前。

「まあいいか。大した雨でもねーし、遅刻すんぞ。お前もさっさと行こうぜ」

そう言つて学校へと歩き出す竜司に、

「ちよ、まつ……ッ!？」

そう言いかけた時に鋭い頭痛がした。

「うっ!」

「くっ!？」

竜司が何故か呻いた。

頭痛に顔を歪めつつも、俺はチラリと周りを見ると、竜司や主人公も、同じような頭

痛を感じている。

まさか、俺もなのか!?

あまりの非現実には戸惑っているよ、

――それが運命ってヤツじゃないの？

また、あの人の声が聞こえた。

――さあ、君はこれからどうするんだい？

――また、抗うかい？

――それとも逃げるかい？

――まあ、今の君だと結果は変わらないけどね

どう言うことだ!?

――それは君自身が考えることだ

――今の僕には関係ないから精々クソガキなりに足掻きなよ

おい！待て!!説明しろ！

その後、何度も問いかけるが答えは返ってこず、竜司と主人公の声でようやく現実を引き戻された英治は仕方なく2人の後を追うことにする。

そして、俺は細道を歩きながら考える。

このまま進めば、いや既にここは認知世界かも知れないが、間違はなくこのまま行けば鴨志田のパレスに付いてしまう。だが、それがなければ、主人公はモルガナと出逢わない上に、彼のペルソナが目覚めない。それは困る。

なら、無力な俺がやるべきことは限られる。

1つ、主人公にペルソナを目覚めさせる。

2つ、彼とモルガナを出逢わせる。

3つ、全員が重症をせず帰還する。

の3つになる。意外と多い上に無茶苦茶だな、おい！

そんなことを考えていると、

「なッ!？」

パレスを見た竜司が、驚いて声を上げる。

そして来た道を振り返り、

「道…間違えてねーよな。」

「やっぱ、合ってるよな。」

来た道を確認するように呟いた。

如何やら、始まってしまったようだな。さて、どうやって全員無事に帰還するかだな。

と言うか帰り方は知らん！

鴨志田のパレスへと入っていく。

見知った高校ではなく煌びやかな装飾が施され、シャンデリアが吊るされた、いかにも、という感じの内装になっていた。正面に、趣味の悪すぎる鴨志田の絵が見える。1日でもいつも通っている高校が城に変わっていたのだから、竜司はあまりの状況に困惑の反応である。

「……が学校？」

そんな中で主人公が竜司と俺に尋ねた。

「そのはずだぜ。門に『秀尽』って書いてあったしよ」

「一年以上も同じ道を通って登校しているんだ。今更間違えるとは考えにくい。だが、学校にあんな趣味の悪い絵はない」

竜司に続いて、俺も言う。我ながら白々しいと思ってしまった。だが、ここで真実を伝えるのは得策ではない。そもそも信じてもらえないかどうか怪しいし、なぜそんなことを知っているのかを説明出来ない。自分たちの世界がゲームの世界だから、なんて高校生にもなって言ってしまうえば、幾ら友達も竜司でも頭の病気を疑われる。その後も竜司はここが秀尽であることを確認するように、俺たちと問答する。そんなことをしていると、部屋から鎧を着て、剣と盾を持った、騎士のような出で立ちの謎の存在……おそらくはシャドウが出てきた。

「ビビらせんなよ…」

どうやら何かの催しだと考えた竜司は、ため息をつきながら言った。

「誰だお前、生徒なのか？」

そう言いながら、竜司は動く鎧へと近づく。

「つーか、カツコすげーな、この鎧、ホンモンか？」

竜司の問いかけに、鎧のシャドウが答えることは無い。

「黙ってねえで何とか言えよ」

竜司が再度言いかけた時、もう一人の同じ格好をした鎧が現れ、こちらに近づいてく

る。

「お、おい、何だよ。」

とても催し物とは思えない雰囲気思わず竜司もたじろぐ。

そんな雰囲気の中で俺以上に喋っていない主人公が、

「ドツキリだ。」

状況を理解出来ていないのか、または、ふざけているのかは分からないが、かなり天

然が入った台詞を、主人公が言った。いや、マジでナニ言ってるの？

「そんな空気か、これ？」

「そんなわけないだろ。そもそも『ドツキリ大成功！』なんてプラカードを持った仕掛け

人が出てくるような空気ではないぞ」

思わず竜司と共に俺もツツコミを入れてしまった。

「だよな、とにかくコイツらやべえ。逃げるぞ！」

「分かった」

「その方がいい」

そう言つて主人公と竜司が入口の方へ駆け出すのだが、鎧型シャドウがぞろぞろと俺たちを取り囲み、逃げさせまいとする。

「くそ、何なんだよこいつら！」

竜司が叫ぶ中で、どう言う訳か危機的な状況とは裏腹に、俺は安堵していた。原作知識の記憶が正しければ、この後は主人公と竜司が捕らえられ、牢屋に連れていかれる。そして、彼はペルソナ能力に目覚める。

そんな俺の後頭部に、勢いよくシャドウの盾がぶつけられた。

「があッ!？」

鈍い痛みにも声が漏れ、そのまま床に倒れる。

「英治!？」

「大丈夫か!？」

竜司と主人公の叫ぶ声が聞こえる。ホントいい奴らだな。

自分がいきなり殴られるとは思っていなかったが、竜司が殴られなくてよかった、とさえ思っている。まあ、たった1人の友達だからな。

そんなことを考えている最中も、竜司と主人公は鎧たちに取り押さえられ、運ばれていく。ひとまず2人がそこまで怪我をしていなくて安心した俺は、そのまま意識を手放してしまった。

「おいー起きろ、このゴミがー」

罵る声と、顔に感じる痛みで目が覚めた。

段々と目が開けると目の前にいたのは、寝起きにはキツすぎる鴨志田だった。それもハートが1面に描かれた趣味の悪いマントに、頭には安っぽい王冠付きと来た。キモいな、ゲームで知っているとしても、リアルは。ああ、吐きそう。

コレは間違いなく、鴨志田のシャドウだ。

チラリと周りを見ると、どうやら牢屋のようだが、竜司も主人公も見当たらない。代わりに鴨志田シャドウと、俺を立たせている鎧型のシャドウが2体。詰んだな、コレ。

「どうした？あのクズどものことでも気にしているのか？」

「安心しろ。あいつらは今頃、隣の牢屋で処刑を言い渡されている所だ」

やべ、頼むからペルソナ出しておいてくれよ、主人公。

「不法侵入者は即刻処刑。それが、この俺様の城でのルールだ。」

相変わらずの物言いに思わずフツ、と失笑の笑いがこぼれてしまう。

それを面白くないと思つたのか、鴨志田が顔を顰めて叫ぶ。

「貴様……俺様はな。貴様のそういう所が癪に障るんだよ！」

つたく、また殴んのかよ。クソゴリラが。

「俺様に逆らうゴミ虫など、絶望し、恐怖し、下を向いて生きていればいいのだ！」

「なのに貴様と来たら、いつもいつも、俺様の邪魔をする！」

「あの坂本を助けやがって！アイツの居場所を壊してやろうとしたのに、貴様のせいでアイツは今も陸上部の奴らとのうのうと生きてやがる！」

はあ、教師とは思えないセリフだな。

あの時と違って、ここは鴨志田のパレスだ。

周りの目など気にする必要も無いようで、顔も身体もお構い無しに殴打する。

凄まじい激痛に加えて、口の中に滲む血、青くなつていく肌が見えるが、諦めなのか、何処か英治は余裕のある態度のままである。

終始そんな態度を取ったままだからなのか、鴨志田の怒りは更にエスカレートして行く。鴨志田は鎧型シャドウから取った剣を構える。

「しばらくいたぶってやろうと思ったが、もういい。この場で貴様の死刑を執行する！せいぜい、死んで俺様に逆らったことを償うんだな!!」

「けっ、償いのつの字も知らない生殖ゴリラがよく言えるよ」

「貴様あ!!」

鴨志田が剣を振り上げた所で、牢屋の外から竜司と主人公が見える。

「おい、英治!!」

「見つけた!」

竜司と主人公が叫ぶ。そんな彼らをよく見ると主人公の方は割とカッコいい怪盗服を着ているため無事にペルソナに目覚めたようだ。これでもう安心だ。

「なに!? 貴様ら、どうやってここに無能共め……。ふん、まあいい。貴様らはこの後、俺が直々に処刑してやる。今は指をくわえて見ている!」

鴨志田が、勝ち誇るように叫ぶ。

「ふざけんなよ! 頼む、お前! あいつを何とかしてくれ! 友達なんだ!」

「ああ」

主人公に竜司が叫ぶが、ご丁寧に牢屋には鍵がかかっているため開かない。2人には

悪いが、マジで助からなさそうだ。

全く、俺の人生も散々だった。

透さんを止めようとして足掻くも失敗。

その所為で、両親はたいへんな目に遭ってしまった。

結局、このまま負け犬のまま終わるんだな。まあ、不思議とそれほど悪い人生でもなかったけど、透さんとの手紙のやり取り、竜司と友達になれたり、父と母には親孝行できかないのは申し訳ないな。

そんな様々なことを考えられながら、諦めようとしていると、
『それで終わりがいい?』

またあの人の声がより鮮明に聞こえてくる。

『僕の時と違って、友達のため、世界のため御大層な理由を並べて、何もしようとせず、死ぬとか、今の君って生きてるって言えるの?』

うるさい、自己中ヤロウ。

『本当に君はこれで満足かい?』

『新しい世界で、何もできず、何を知ることもなく、ただ死んでいく』

うるさいな！なら、どうしろって言うんだよ！！

俺に何が出来る。

アンタの時もやれることならもうやった！

やり切ったんだよ！！

『違うさ。君は諦めたんだよ。本当の意味で、この世界の住人として生きること、現実
に足掻くことも、伸ばせば手に出来る力さえも』

何が言いたいんだよ！！

無力な俺に何をしろってんだよ！！

そこまで言うって今度は、

『お前が本当に求めているのは、なんのしがらみもない自由』

今度は近藤英治オレ自身の声が聴こえてきた。

『お前が成したいこと、お前が思い描く未来を創り出すことができる自由』

『お前が勝手に望む身勝手な欲望エゴを現実ユに誰の都合も関係なしに押し付ける自由』

ああ、そうだよ……そうですよ！

俺が勝手に望むハッピーエンドを目指していましたよ！！

醜いほどに自分勝手に身勝手な未来を勝ち取りたいんだよ、近藤英治今のオレは！！

「自由チカラをオレに寄越せええ！」

叫ぶオレに対して、

『とうとう認めたみたいだね』

『そうソレこそオレお前の願いにして、醜エゴい欲望』

嬉しげなオレとあの人の二つの声と共にと、頭に激痛が走る。

「がああ……ッ!？」

『『ならば契約だ。我は汝、汝は我』』

「はあ……はあ……ッ!」

思わず膝を付き、頭を抑える。

『『仮初の現実で敗北してもなお、抗う賊よ』』

「があああああ!!」

頭の痛みが更に強くなり、思わず叫ぶ。

『『己エゴが醜エゴき欲望を糧とし』』

『『カノ者のカケラを継承せよ!』』

痛みが収まり、代わりにオレの顔に黒い仮面が張り付く。

『『さあ、今こそ逆襲の狼煙を上げる刻だ!!』』

金色と赤色の眼をした英治は黒い鉄の仮面は両手で強引に引き剥がしながら、叫ぶ。

「ペルソナあああああ!!」

仮面を剥がすと、当然血飛沫が舞い、辺りに撒き散らされるが、それらが床に模様を描くよりも前に、爆炎のように噴き出す青と赤炎が英治の全身を覆い尽くしていく。

仄暗い闇が差す牢屋を煌々と照らす炎。

やがてそれが晴れると、制服とは似ても付かない装束を身に纏った英治が姿を現した。

彼の背後に浮かび上がる虚無の道化師とともに。

『クククク、まさか奴のカケラを継承するとは驚愕だぞ、契約者よ。我は、嘗て常闇から出でし、禍ツ神。だが、今宵からは我は偽りの現し世を荒せし禍ツ神……』

彼の中にあつた“虚無のカケラ”が、彼の中に眠る反逆の意志が混じり合つたことで、嘗ての姿とは逸脱する姿へと進化した紅蓮の道化師は、

『我は新たな賊——マガツイザナギ・ジカ賊神!!』

新たな主と共に、漆黒の賊へと変貌する。

未確認化け猫出現注意!

よりもよって「あの人」と同じペルソナを覚醒させるとか、

ホント、世の中クソだな!!

つたく。でも、悪くないなコレはコレで。

そして、ペルソナを覚醒した俺は自分の周りにいたシャドウたちへ向けて、頭に浮かん：いや、マガツイザナギ・賊神ビカロが教えてくれた呪文を唱える。

「マガツマンダラ!!」

「ぐああああああ!!」

呪詛と怨嗟に満ちた衝撃波によって鎧型のシャドウたちは断末魔を上げて、消滅した。その結果、英治の近くにいる鴨志田のシャドウは、冷や汗を滝のように流し、怯えた表情で後退りる。

「ひいッ!?!」

「はっ、無様な面だな。鴨志田センサー!」

壁によって逃げ道がない鴨志田のシャドウは怯えた様子でいるが、英治は特に気にした様子もなく変わらなずの無表情のまま鴨志田のシャドウの顔面へ回し蹴りを叩き込

んだ。

「さっきの礼だ!!クソゴリラ!!」

「がばああ!」

吹き飛ばされた鴨志田から鍵が落ちたため、英治は素早く拾い、牢の外にいる竜司に投げる。

「竜司!頼む!」

「お、おうよ!」

鍵をキャッチした竜司はそそくさと牢の扉を開け、英治を外へ出すと怒りで凄まじい顔になってゐる鴨志田を見て、素早く牢の扉を閉め、鍵を何処かへ投げ捨てた。

「よし、2人とも逃げよう!」

「だな!」

「マツハG o G oだ」

そう言つて主人公に肩を借りられながら英治は急いで、その場から離れていった。そして、ある程度の所まで来ると一旦休息を取るべく足を止める。

「ありがとう、助かった。えつと……」

「雨宮蓮だ、よろしく。無事とは言い難いが、良かったよ」

「近藤英治だ。改めて、ありがとう」

肩を貸してくれていた主人公に改めて礼を述べていると、

「お前といい、英治といい、どうしたんだよお前らの格好!」

竜司がこちらの格好を問いたです。

改めて、自分の格好を見てみると、黒いマントがついた所々赤色の装飾が施されている漆黒の軍服に、赤いラインが入った軍服の制帽をいつのまにか被っていた。加えて、付けている仮面は黒一色で統一されたベネチアンマスクと鉄仮面が合わさった様な見た目をしている。例えるなら、日本の代表ロボットアニメに登場するミスター武○道によく似ている形状をしている。後、何故か既に俺の腰には刀があった。

「うわお、厨二病感満載じゃん。ハズいな」

「感想がそれかよ……」

「よく似合っている」

「ヤメテ。かなり精神的にダメージ喰らうから」

ちよいと笑みを浮かべる雨宮に力なく睨むと、俺たちの怪盗服は消え、先ほどまで着ていた制服姿に戻った。どうやら、力が完全に御し切れてはいない様だ。ま、初っ端だから仕方ないと言えば仕方ないか。

竜司が声をかけてくる。

「なあ、何だったんだよあの格好と、あの後ろに立ってたヤツ!」

先程のペルソナのことだろう。ここで正直に答えてしまうと、何故ペルソナのことを知っているのかという疑問が生まれてしまうから竜司には悪いが、ここはシラを切らせてもらおう。

「分からない。気がついたらあの格好になっていて、後ろに立っていた」

「俺もだ」

「やっぱし、そうか…なんなんだよ一体?」

竜司が頭を抱えてしまうのも無理もない。突然、学校が城に変わり、殺されそうになり、2人の人間の衣装が変わって、変な力を使っていたら、現代に生きている人間なら誰でも混乱する。と言うか、今思うと結構冷静だな、雨宮は。流石は主人公。

とりあえず2人に説明することも出来ないので誤魔化して道を探す。

休息を終え、途中で出口のような扉を見つけるものの、その先は出口ではなく、水路のようだった。

「オイオイ…嘘だろ…出口じゃないのかよ! いったい、なんなんだよここ!」

「まさに迷路だな」

思わず悪態をつけてしまう竜司と残念そうな面持ちの雨宮に、

「落ち込んでても仕方ない。早く出口を探そう。」

そう言って、先に進むことを促す。

「わーてるよ！ 行くぞ！」

「早く行こう」

先へと進むと、その先は行き止まりになっていて、意味深な橋と石像が置いてあった。

「また行き止まりかよ」

「引き返して別の出口を探そう」

「出来るだけ奴らに見つからない様にな」

竜司が少し落胆し、俺と雨宮が冷静に頭を切り替えて先に進もうとすると、

「おい、その3人組み！」

牢屋の方から声がした。

「そのキンパツと、くせつ毛と……えーと地味なの！こつち向け！」

「……よし、異常なしだな。行こう」

「いや無視すんなよ！」

「待ってやれ」

駄猫の物言いにイラつとした俺は、牢屋を無視して、別方向へ行こうとする。すると、駄猫と竜司はツツコミを、雨宮は肩に手を置き、俺の足を止めさせてくる。渋々、竜司と蓮と共に牢屋の方に体を向ける。

牢屋の中には、黄色のスカーフをつけた2足歩行の黒い猫のマスコットのよう生き

物が動いていた。

完全なるチョツ……モルガナだ。

まあ、とりあえず予定していた目標の大部分は達成出来たな。雨宮のペルソナ覚醒、竜司の無事、モルガナ確保の3つだが。

「なんだ!?! こいつ!?!」

竜司が驚きの声をあげた。無口な雨宮もかなり驚いた様子だ。

表情が分かりづれえー。

そんな2人を置いて、モルガナが話を続ける。

「オマエら、城の兵士じゃねえな!?! こっから出してくれ! ほら、そこにカギあるだろ!?!」

モルガナが指し示した先には、確かにこの牢屋の物と思われる鍵が壁にぶら下がっている。もうちよつと、隠せよ。いや、探す手間が省けるからイイけどさ。

「いや、外出てえのはこっちなんだよ! 化け猫!」

「化け猫じゃねえーよ!! 引つ掻くぞ、金髪ヤンキー!」

「ウルセエー! けど、出してやりてー気持ちはあるけど。敵かも知れねーやつを出すわけにはいかねーよ!」

「捕まってるのに敵なわけないだろ! 助けてくれよ!」

モルガナの悲痛な叫びが聞こえる。どっちの気持ちも分からないでもないが。ヤバい、2人のコントが思いの外面白いわ。そんな俺と違い雨宮は、相変わらざるの天然系疑問の声をあげる。

「猫?」

それに対して、

「猫じゃねえって言うてんだろ!!もつかい言ったら許さんぞ!」

シャーと怒り出した。まんま猫じゃん。

正直猫以外だったらぬいぐるみか何かにはしか見えない。

そんなコントを見ていると、兵士の足音が聞こえてきた。

「竜司、こいつが敵かは分からないが、この城の出口について知ってるかもしれない。連れて行った方がいいんじゃないか?それにそろそろ鎧どもが近づき始めている」

「なあオマエら、出口が知りたいのか?なら、出してくれたら案内するぞ!捕まったら処刑は嫌だろ?」

俺の提案に便乗する様にモルガナがさらに選択を迫る。モルガナを疑う竜司は雨宮と俺にココソコと喋る。

「(悪いやつには見えねーけど、どう見ても怪しすぎんだろ。人間でもねーし、猫くらいにはしか見えねーけど猫でもねーって言うてるしよ)」

「だが、かわいいそうだな」

「(ちよつと口は悪い猫だがな)」

「聞こえてるぞキンパツに地味面！ワガハイは猫じゃねえって言ってるんだろ！もう一度言ったら許さんって言ったよな!？」

モルガナには聞こえていたようで、かなり怒った様子だ。

「騒ぐなら出さない」

「次地味言ったら、剃る」

「にや、にやに!?き、騒がない!もう騒がないから、出してくれよ!」

ピシヤリとした物言いの雨宮に対して慌ててモルガナが叫んだ。流星はリーダーのジョーカー、モルガナの扱い方が分かってきたようだ。

……おい、竜司。なんつう所を抑えてんだ。

お前のそんな所なんか剃るかよ!!

そんな俺たちの耳には、兵士シャドウの足音はどんどん近づいてきている。コレはかなり不味いな。

「マジなんだろうな!？」

足音に竜司が焦ったようにモルガナに問いかける。

「早くしないと捕まるぞ!」

流石にふてぶてしいな、モルガナ。

というか竜司だけは舐められてる気がする。

「し、仕方ねえな!」

そう言つて鍵を拾い上げて、牢屋を開けた。

モルガナは牢屋から出ると背伸びをして、深呼吸を大きくしている。

「フウ、シャバの空気はうまいぜ。」

そんなのんびりとしたモルガナに、

「出口はどこなんだよ、化け猫!」

焦っている竜司は急かすように叫ぶ。

「猫つて言うなっいつてんだろ!ワガハイにはモルガナつていう名前があるんだ!」

「んなこと今はどうでもいいんだよ!早くしろ!」

モルガナの名乗りも聞いてはいられないように、竜司が更に急かす。

「わ、分かっているよ…ったくよ。ついてこい、お前ら。後、静かにだぞっ!」

ふてぶてしい態度のモルガナが走つて行く後を俺たちは追走していく。

一方、本物の秀尽学校では。

「全く、もう4限じゃない」

雨宮と英治の担任である貴方のベッキーこと川上 貞代先生が職員室で溜息をつく。「前科持ちなんて言われてる雨宮蓮君はともかく、今まで無遅刻無欠席の近藤君まで学校に來ないなんて…何やってるんだか」

悪い噂がある英治の人柄をある程度知っている彼女は、何処か面倒そうに憂鬱げな表情を浮かべていく。

「佐倉さんも、近藤くんのお母さんも家は出たつて言ってるし、警察に連絡をした方が……いや、そんなのは余計面倒なことに」

「ハア。面倒なこと押し付けられたとは思っていただけ、予想以上だったわ……ただでさえ、問題児扱いされている近藤くんがいるだけでも疲れるのに」

そう愚痴倒してから、授業の準備を進めていくのであった。

そんな風に担任に愚痴られている彼らは、現在城の廊下を走っている。

そして、しばらく走っていたモルガナは、上がった橋と石像のある所で止まった。その石像は鴨志田の顔のようで、無駄に精巧に作られているせいか、凄く不気味に感じる。ヤバい、殴りたい。

「なにやっつてんだ?」

竜司がモルガナに問いかける。

「はあく何やっつてるか分からないのか?ま、お前じゃ分からないだろうな」

先ほどの猫発言を根に持っているモルガナが悪い笑みを浮かべて挑発するように竜司へ言う。

「んだと!勿体ぶってねーで早く教えろよ、化け猫!」

「猫って言うなって何回言わせんだ!オマエだけは絶対に許さんぞ!」

こいつら、今兵士に追われていることを完全に忘れてるな。

「はあ……コイツら……」

「……………」

雨宮もやや呆れたような表情だが、無言で肩を叩くのはどういう意味かな?

まさかと思うけど、押し付ける気じゃないだろうな!?

この石像に何か仕掛けがあるのか鴨志田像にモルガナは色々試している。

「こいつには時間がねーんだよ!それともまた閉じ込められてーのか、こいつ!」

「閉じ込められるもんなら閉じ込めて見やがれ！ワガハイにはな、その2人はともかく、お前には無い能力が」

まだ言い争いながらモルガナは試行錯誤していると、俺は鴨志田像のアゴが動くことに気づいた。なので、騒ぐ2人を置いて、無駄に長いアゴを下げてみる。すると、目が光り、橋が下がっていき、向かい側に通れるようになった。

よし！流石は俺!!

「…あつ」

「……（*、▽、）ドヤ~~~~~♪」

「お手柄だな」

モルガナと竜司が同時に間抜けな感想を言うが、兩宮はサムズアップで俺を賞賛してくれた。

「こいつ、やっぱ牢屋に閉じ込めといた方がいいんじゃないかねーか？」

「おいー」

「モルガナがいなくてここまで来なかったんだから、辞めてやれ」

竜司の呟きに、モルガナは反応し、俺はめんどくさいが一樣としてフォローを入れておく。しかし、どうでもいいが、2人はもう少し仲良くしてほしいものだ。一々止めるのがめんどくさくなってきたぞ、マジで。

未だにぎやーぎやーと言い争いを続ける竜司とモルガナを尻目に、次々と先へと進んで行く。そして、道中にあった橋を抜けてしばらく走っていると、ドアから兵士が出てきて鉢合わせてしまった。

ヤベーイ。

「う、うわあ!! やべえ、きたあー!!」

思わず竜司が腰を抜かす。俺と雨宮が咄嗟に前に出て構えようと、突然怪盗服にチェンジした。

よし、イケる……かな。

「ちっ、とんだ素人だなー!じっとしてろ!」

竜司に向かってモルガナが叫んだ。

「おい、オマエら!戦えるんだろ?やるぞ!!……今こそ、威を示せ! ゾロ!!」

「来い!!アルセーヌ!!」

「来やがれ!マガツイザナギ・賊神!!」

「お前もそれ、出んのかよっ!」

あつ、気合いで何とかなったな。

驚いた様子で竜司が言ったが、雨宮が素早く隠れる様に促したので竜司は下がってくれている。まだ、覚醒していない今の竜司に危険なことをさせるわけにはいかない。

「速やかに黙らせてやる!」

竜司の叫びを気にせず、モルガナは手を組んで、戦闘態勢に入る。

すると、2体のシャドウも兵士の姿から変わり、青いドレスを着た妖精の様な見た目の生き物ことピクシーと、カボチャのお化けことジャックランタンにそれぞれ変わる。

「シャドウめ…迎撃態勢に入りやがったな! 2人とも、アイツらはワガハイたちを殺すために、本気を出してきたってことだぜ!」

「了解した」

「なら、こつちもやる気でいくまでだ」

「ふつ、支援してやるから死ぬ気で戦え! 行くぞ!」

モルガナの言葉に、雨宮と俺は覚悟を決めて構える。

まず、雨宮は妖精に向かって、今のアルセーナが使える魔法を放つ。

「エイハツ!」

アルセーナから放たれた赤黒く禍々しい弾のような物が敵に向かって飛んでいく。その攻撃のスピード自体は遅いが、何とか妖精シャドウはマトモに受けたようだ。

俺も続いて、マガツイザナギ・ビカロ賊神に指示を出す。

「ぶつた斬れ!!」

先程の攻撃で弱っていたようで、怯んでいた妖精シャドウはマガツイザナギ・一賊神

が持っている双刃によって斬り裂かれると、そのまま断末魔を上げながら消滅した。

見た目が見た目なため、あまりいい気分ではないが、この切羽詰まっている状況なので仕方ない。切り替えて、もう一方の敵に体を向けるが、

「ふん、オマエらやつぱり素人だな」

モルガナが遮る様に言った。

まあ、その通りなんだがね。

初ペルソナしたばっかりなんだからな。

「戦いつてのはこうやるんだよ！威をさせろ！」

そうモルガナが叫ぶと、突然敵の居るところにだけ強風が吹き、その風が敵を襲う。

恐らくは、モルガナは確か風属性のガルを唱えたのだろう。弱点だったようで、カボチャシャドウは態勢を崩した。

その辺りはゲームと共通なのか。

「弱点に攻撃して敵をコカす！その隙について更に動く！基本中の基本だ！覚えとけ！」

モルガナがそう言って、続けざまにシャドウに剣で切りかかった。弱点を突かれて弱っていた敵は、そのまま倒れた。

「オマエら、やるじゃねえか。ペルソナの力も、中々のもんだ」

「ペルソナつてのは、お前らがブワーって出す、あれか？」

「呼び出す時、2人がそれぞれ仮面を剥がすのを見たろ？　人は誰でも、仮面を被つてる。それを自覚し、自ら剥がすことで……」

「そこまで説明した所で、俺と雨宮の衣装がまた元に戻る。」

「また戻っちまった」

「力の扱いが、まだ完全じゃないようだな。こんだけ騒がれてて、変身が解けるはずがない。あの姿は本来……」

「あー、もういい！　さっきからワケわかんねえしー」

とうとうキャパオーバーなため頭を掻きながら説明を遮って竜司が言った。

「話くらい、じつと聞けねえのかキンパツ！」

遮られたことが不服だったのか、不満げにモルガナに食ってかかる。

「ああ、また言い争いが始まりそうだったので、話に入ることにする。」

「とりあえず、説明してる時間はないんじゃないか？　早い所、出口に行こう」

「そうだな、出口までそう遠くない。急ぐぞ。」

モルガナもここで話していてもしようがないと思ったのか、話を終えて走り出す。しばらく着いていくと、牢屋の中に秀尽のジャージを着た生徒が這いつくばっていた。確か、彼はバレエ部の生徒だったと思う。そして、パレスは鴨志田の認知上の世界だった

はずなので、鴨志田はバレー部の生徒を奴隷のように扱っている。だから、牢屋に入れられているということになる。

「ちよつと待った!」

そんな生徒を見た竜司が突然立ち止まる。

「この、こいつの格好…どつかで見た気が」

「ウチのバレー部じゃないか?」

俺は、悩む竜司に助け舟を出す様にそう言った。

「おお! そうだ! パニックって思い出せなかつた!」

竜司が大声で言った。よほど気になっていたようだ。

「今は他人の心配してる場合じゃないだろ、行くぞ!」

モルガナが叫ぶように言う。

そうこうしている間に、前方からシャドウがやって来た。

「言わんこつちやねえ!」

「迎え撃とう」

「連戦は疲れるな」

雨宮の言葉に疲労が溜まってきた俺と怒り気味のモルガナもそれぞれ構える。

幸いにも、敵シャドウは先程と同じくジャックランタン2体とピクシー1体であった

ため、今度は苦戦することも無く、素早く戦闘を終わらせることが出来た。

「よし、新手が来る前に行くぞ！」

モルガナが急かすように言った。

その後も雨宮と竜司は牢屋の中の生徒達の姿をした鴨志田の認知上の人物達を気にしていたが、

「ついてこないなら、好きにしな！」

「わーたよ!!行きやーいいんだろ!!」

モルガナの言葉に、渋々と言った様子で牢屋を後にした。

一様、俺も不審がられるのも嫌なため表面上は渋々げな表情をしておいた。そして、そのまま正面ホールへと抜け、モルガナの後を追う。小汚い小部屋に入ると、中には通気口があり、蓋を取って入ればそこから抜けられそうだ。

蓋を竜司が強引に外し、脱出の準備が整う。

「やつとだぜ!コレで出られる!」

「喜ぶのは出てからにしておけ」

喜ぶ竜司に対して、モルガナは注意するように警告する。

その後、どうやらモルガナはしばらくの間、この鴨志田パレスに残るようだった。そんなモルガナに対して、俺と雨宮は感謝の言葉を述べて、俺たちは通気口へと入って

行った。

「あいつら、使えそうだな…ワガハイの見立てが確かなら、あのクセっ毛と、地…フツ
のやつは特に…な」